

主イエスは、人への神の愛や世界に対する神の計画をたとえを用いてわかりやすく教えました。主イエスは、農夫や漁師、羊飼いや主婦たちの日常の生活を使って、神のみこころを目に見えるように描かれました。主イエスの「たとえ話」には金持ちや貧しい人、賢い人や愚かな人、主人やしもべ、善良な人や悪賢い人など、あらゆる人物が登場します。「たとえ話」とは言うものの、どれも人々が実際にあったこと、よく見聞きすることばかりで、とても現実的です。

きょうの箇所では、主イエスは、「いのちを支え、からだを守ってくださるのは神である。神が私たちが養ってくださるのだから、食べ物や着物のこと、つまり、日々の必要のことで心配するな」と教えておられます。しかし、いくら「心配するな」と言われても、心配や思い煩いの絶えないのが、私たちです。特に今は、ちょうど一年前から続いています「新型コロナウイルス」のことで、心配と不安が何倍にもなりました。そんな私たちに、イエスは、神が、私たちのことを、どんなに心にかけてくださっているかを、身近な「空の鳥」「野の花」を「たとえ」に使って示されています。

イエスのたとえ話は「言葉で描かれた絵」です。絵は「鑑賞」するもので、「解説」するものではありません。もちろん解説してもらってより深く作品を見ることが出来ますが最終的にはどれぐらい作品にその人が感動できるかにかかっています。ですから、今日のたとえを理解するには、礼拝の後、外に出たら、鳥を見つけ、花を見つめるのがいちばんよいのかもしれません。自然の中に身を置いて、神の言葉を思い見ることが、どんなに大きな祝福であるかを、皆さんも、今まで経験されていることと思います。

「鳥（カラス）のことを考えてみなさい」「ゆりの花のことを考えてみなさい」とある「考えてみる」と訳されている言葉は「見る」と訳すことができるのですが、たんに、「眺める」というだけでなく、「観察する」「気付く」「思いみる」などという意味があります。ですから、空の鳥、野の花について詳しく「観察」する思いで考えてみたいと思います。

イエスは、この「たとえ」で「カラス」と「ゆり」を使っていますが、それはより一般的に「空の鳥」、「野の花」と言い換えてよいと思います。22 節に「何を食べようかと心配したり、…何を着ようかと心配したりするのはやめなさい」とあるように、「空の鳥」は「食べ物」に、「野の花」は「着物」に関連して語られていることが分かります。

24 節に、空の鳥は「蒔きもせず、刈り入れもせず」とありますがほんとうにそうです。鳥は、神が備えたものをついばんで生きています。「納屋も倉もありません」というのもそのとおりで、何日分もの食べ物を蓄えはしません。しかし、鳥は毎日エサに事欠くことはありません。神がそれを備えておられるからです。詩篇 147:8-9 にこうあります。「神は雲で天をおおい、地のために雨を備え、また、山々に草を生えさせ、獣に、また、鳴く鳥の子に食物を与える方。」詩篇 145:15-16 には「すべての目は、あなたを待ち望んでいます。あなたは時にかなって、彼らに食物を与えられます。あなたは御手を開き、すべての生けるものの願いを満たされます」とあります。聖書は生きているものはみな神様が養って下さっているのだと言っています。

次に「野の花」も「紡ぎもせず、織りもしない」のですが、みごとに装いをしています。神が造った自然の花の美しさに比べれば、人工のものはみな色あせて見えます。人工のものは自然の美しさに近づくのであって自然そのものになるわけではありません。ソロモン王の時代に、イスラエルは物質的にいちばん栄えましたが、イエスは、「栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした」と言っています。野の花を美しく飾っておられるのは神です。

田畑を耕し、種を蒔き、刈り入れるのはどちらかといえば男性の仕事。糸を紡ぎ、布を織るのは多くの場合女性の仕事です。神は私たちに最小限ぎりぎりのものしかくださらないのではなく、豊かに与え、ま

た、美しく装わせてくださいます。イエスは、このたとえで、男性にも女性にも、そのことを教えています。

私たちはよく言います。「現実の人生は不足ばかりで、イエスの言うようなものではない。」そうでしょうか。イエスは夢のような非現実的なことを語っているのでしょうか。そうではありません。イエスの語っている満ち足りた美しい人生は存在します。神を信じ、キリストに従ってきた人たちはみな、人生の豊かさを味わい、その美しさを表しています。信仰者であるなら、人生のどこかで必ず神の守り、支え、養いを体験していると思いますが如何でしょうか？

それでは改めてなぜ、人にこのような祝福が与えられるのでしょうか。どう思われますか？ それは、神が人を「鳥よりも、はるかにすぐれたもの」(24節)として造り、神の愛の対象とされたからです。神が、空の鳥や野の花さえ心にかけてくださるなら、人間のことは、なおのことです。ルカ 12:6-7に「五羽の雀は二アサリオン(一羽 200円ほど)で売っているでしょう。そんな雀の一羽でも、神の御前には忘れられてはいません。…あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です」とあるとおりです。ルカ 12:7には「それどころか、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています」とあります。私たちの髪の毛は、いちばん多い時で10万本もあるそうです。髪の毛は、絶えず生えたり抜けたりしていますので、誰も、その数を正確に数えることなどできません。(ただ個人的には数は正確には分かりませんが確実に減っていることは分かります)しかし、神は私たちの髪の毛の数を数えて知っておられるというのです。これは、そんな細かいところまでチェックされているという意味ではなく、神が私のことを気にかけて覚えていてくださるということです。神は私たちの人生と生活のすべてを、些細なことにといたるまで、いつくしみの心で知っていてくださるというのです。

神は、あらゆる造られたものを超えて、いと高く、聖なるお方です。神と人との間には、創造者と被造物という根本的な違いがあります。神は永遠で無限で変わらないお方ですが、私たちは一時的で有限で変わりゆく者です。そうであるのに、神は、その違いを乗り越えて、ご自分と人との間に人格のまじわりを結ぶために、人に、ご自分の性質の一部、聖さや義しさ、愛や真実、知恵や知識などを与えてくださいました。創世記 1:27に「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された」とある「神のかたち」とは、こうした神との共通の性質のことをいいます。

しかし人は、罪のために、この「神のかたち」を損なってしまいました。知恵や知識の一部は残りましたが、「聖さ」や「義しさ」、「愛」や「真実」などは、すぐに失われてしまいました。人類は知恵・知識を使って文明を築き上げ、社会を発展させてきました。けれども、それは必ずしも正しい発展ではありませんでした。神を知る知恵と知識を失ったため、その他の分野の知恵・知識においても、それを正しく使うことができませんでした。そのため、正しく用いることを思いながらも地球環境を壊し、自らの健康を脅かし、社会の混乱を引き起こしてきたのです。そんな中であって人は、自分の知恵や力にしがみつきました。私たちは自分の人生や生活から神を締め出せば、なにもかも自分の力で行わなければなりません。そして、なにもかも自分の力でやろうとすると、心配ごとが増え、あらゆることに思い煩って疲れ果ててしまうのです。

神は、そんな私たちが、もういちど「神のかたち」を回復するために、御子イエスを人としてこの世に送ってくださいました。私事ですが私の娘は幼い頃から今もですがアニメのドラえもんが大好きで、よく一緒に映画やドラマを観たものです。いろんな便利な道具が出てきますが中でも「どこでもドア」というのがありますね。そのドアを開けると今いる世界から全く違う世界に行けるというものです。卑近な例で恐縮ですがイエス・キリストの十字架はまさにこの世から天の御国につながる門であり、扉でもあるのです。神の御子が「人のかたち」をとることによって、人が「神のかたち」を取り戻すようにしてくだ

さったのです。神から見るとわざわざ人のかたちをとって私たちのところに来て下さったということは人から見るとイエス・キリストを通して神につながっていくということです。ですからイエス・キリストを信じることによって、私たちは神が私たちを造ってくださった、本来の姿に立ち返ることができるのです。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」ヨハネ 14:6 イエス・キリストを信じることによって神の子どもとされ、神を「天の父」として信頼して生きる人生が与えられるのです。神の無い人生には鳥のさえずりや色とりどりに咲く花が心に喜びを与え、目を楽しませてくれるものとはなりません。創造主なる神を否定することはすべてのものは偶然そこにあるわけで、意味を問うことはありません。すべては偶然の産物です。そうすると神を否定する世界は空虚で、わびしいものになるのではないのでしょうか。

空の鳥、野の花は、蒔きもせず、刈り入れもせず、紡ぎもせず、織りもしません。ただ神によって養われ、生かされています。だから、人間も、働かなくてよいというわけではもちろんありません。人は勤勉に働くべきです。神は忠実に、勤勉に働く者に労働の実を与えてくださいます。しかし、いくら懸命に働いても、そこに神への信頼がなければ、不安と恐れに追い立てられます。その実は少なければ不安になります。丁度良くても人と比べて一喜一憂のありさまです。多ければ盗まれはしないか、人にやっかまれるのではないかという心配までします。つまりいつまで経っても労働の実を楽しむことができないのです。

ですから「神への信頼の中で働く。」それが、私たちに求められていることです。イエスはその模範です。イエスほど、朝早くから夜遅くまで、勤勉に忠実に働いた方はありません。しかも、イエスはその働きのすべてを父なる神への深い信頼にもとづいて行ったのです。イエスは、いつも、ご自分に注がれている父なる神の愛に満たされていました。この「たとえ」の最後で、イエスは、弟子たちに「ああ、信仰の薄い人たち」と言いましたが、弟子たちの中には、まだ、父なる神の愛が見えていない人がいたのでしょうか。白けた気持ちで聞いていた人もいたでしょう。しかし、イエスは、信仰が足りないからといって、その人を退けたりはされません。「空の鳥を見なさい。野の花を見なさい。よく見て、考えなさい。そして神がどれほど私に愛を注いでいるかを体験しないさい。そうやって神の愛が分かるようになり、神の愛が分かるようになれば、神への信頼が増してきます。神への信頼が増せば、恐れや不安が姿を消していきます。神があなただけのことを心配しておられる。だから、心配するのをやめて、神に信頼しよう」と、信仰の足りない者をも、信仰へと招いておられるのです。31 節で主イエスは「何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。」と言われました。空の鳥や野の花の譬えから神がどれほど人を愛しているのかわかりやすく主イエスは話をなさいました。それでも疑い深い人、石橋を叩いてもまだ渡ろうとしない人もいるかもしれない。それにはいろんな理由があるでしょう。29 節にあるように何を食べようかと捜し求めたり、気をもむ人もいることでしょう。そういったことをしているうちに人生を使い果たすことも可能でしょう。ただ主イエスは「何はともあれ」、これは強い否定ですが、完全な答えが出ていないにしても、神の国を求めることを勧めておられるのです。

最後に今週のみことばを読んで終わります。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなただけのことを心配してくださるからです。」ペテロ第一 5:7 この週も、どんな不安や恐れのある中であつてもいっさいを神にゆだねて歩んでゆきましょう。そして信じ従う者に与えてくださる恵みと祝福を体験させていただきましょう。